

満場一致で決まるはずだった。自信はあった。発表したときのみんなの反応はぼつちりだったし、担任の本宮先生も、いいぞ、というふうに大きくうなずいていたし、書記をつとめる川原くんは、きみの発表した案をひときわ大きく黒板に書いてくれた。

（信号は 渡る前にも 右左）
交通安全の標語だった。来週から始まる秋の全国交通安全週間に向けて、全校でクラスごとに標語とポスターをつくる。五年三組の標語は、きみの考えた案で決まり——のはずだった。

ライバルはいない。他の案はどれもつまらない。（雨の日は傘を差すから 危ないよ）だの（気をつけよう ガードレールの ないドウロ）だの（行き帰り まっすぐ前見て 歩こうよ）だの……。

標語の上手い下手なんて、ほんとうはきみにもよくわからない。みんなにもわからない。だから、おそらく、きみが勝つ。和泉文彦——「ブンちゃん」が考えた標語だからというだけで、みんなの頭には、それが一番なんだ、というのが刻み込まれる。五年三組はそういうクラスで、きみは、そんな五年三組の、間違いないヒーローだった。

ブンちゃん——次は、きみの話だ。

「他に意見はありませんか？」

司会の細田くんが、教卓から教室を見まわして言った。

「決まりだろ、もう」

すかさず三好くんが言った。「ブンちゃんのでいいじゃん、サイコー」

知っているのはそれだけだ。

中西くんは席に着いたまま、黒板を指差して「和泉くんの提案した標語、いいけど、ちよつと間違っていると思います」と言った。「直したほうが、ずつとよくなるから」

教室は一瞬静まり返った。男子の何人かがきみを振り向き、女子の何人かは怪訝そうに顔を見合わせた。

中西くんは落ち着いた口調で、きみの標語の間違いを説明した。このままでは意味が通らない、渡るのは横断歩道や交差点なんだから「信号を渡る」という言い方はおかしい、「渡る前」というのなら「信号」ではなくて「横断歩道」や「交差点」に替えたほうがいい……。

教室がざわついた。男子は困惑顔できみと中西くんを交互に見るだけだったが、女子は小声でしゃべりながら、そうだよ、どうなずいていゝる子が多かった。きみはあわてて本宮先生の顔を盗み見た。先生は腕組みをして、ふむふむ、と中西くんの意見に納得している様子だった。

「だめだよ、変だよ、それ」
きみは声を張り上げる。「絶対だめだよ、そんなの、そつちのほうがおかじいって」と一息につづけ、そこから先はとっさに考えたことを口にした。

「交差点」なんて言っても、一年生や二年生だと意味わかんないよ。ムスカしい言葉つかってカッコつけても、意味がわかんかったら標語にならないから、だからオレ、わざと「信号」にしたんだよ」

中西くんをにらみつけた。でも、中西くんはきみには目を向けず、細田くんにもつと直し方があります」と言った。

冷静な中西くんの口調や表情に、い寄せられたみたいなのに、細田くんは「発表してください」と応え、川原くんもチョークを持って黒板に向

だもん」とつづけ、きみをちらりと見て、へへっと笑う。
「だめだよ」きみは怒った顔で言った。「ちゃんと投票して、多数決で決めようぜ」

はつきりと「勝ち」がわかったほうが気分がいい。負けるはずがない。勉強でもスポーツでも、五年三組の男子できみになう子は誰もいない。「じゃあ、投票にする？」

細田くんは、「A」きみを見て言った。学級委員のくせに、困ったときにはいつもきみを見る。一学期の学級委員はきみだった。「委員を務めるのは一年に一度だけ」という決まりさえなかったら、二学期もきみが委員に選ばれていたはずだった。

「さんせいー」

きみが手を挙げて応えようと、細田くんは「B」顔になり、ようやく学級委員の威厳を取り戻して「じゃあ、投票にします」と言った。そこまでは筋書きどおりだった。

でも、黒板に向けた細田くんの視線を引き戻すように、教室の後ろから声が聞こえた。

「意見、言っていますか？」

耳が聞こえない男子の声だった。あいつだ、とすぐにわかった。二学期から入ってきた転校生——五年三組の一員になってまだ十日足らずの、中西くんだ。

予想外のことに細田くんは言葉に詰まり、「C」きみを見た。

出端をくじかれたきみはムツとして、でもそれを顔には出さずに、いーんじゃない？と目で応えた。その視線を、中西くんに向けて滑らせる。おとなしい奴だと思っていた。前の学校は、市役所の近くの城山小学校だった。二丁目に建ったばかりのマンションに引越してきた。

かった。

（信号は 青になつても 右左）

黒板の字は、途中から——「青になつても」の一言に、川原くんが、あ、そっか、どうなずいたのを境に大きくなった。

教室のざわめきも、どつちつかずで揺れ動いていたのが、しだいに一つの声の束にまとまっていった。うなずくしぐさがあちこちで交わされる。三好くんが、ブンちゃんどうする？と心配そうにこつちを見ていた。それがうつとうしくて、よけい悔しくて、きみはそっぽを向いて椅子に座り直し、窓の外を見つめた。

「じゃあ……いまの中西くんの提案も入れて、どれがいいか……投票に、します」

細田くんが「D」言った。きみは窓の外を見つめたまま、空に浮かぶ雲の輪郭を目でなぞる。勝てない。わかっていた。

五年三組、男女合わせて三十七人のうち、中西くん本人を含む二十三人が（青になつても）に投票した。きみの（渡る前にも）に手を挙げたのは十人——いつも「ブンちゃん、ブンちゃん」とまとわりついてくる連中ばかりだった。

きみは、中西くんの標語に手を挙げた。他の誰にも負けないぐらい右手をピンと伸ばして、高く掲げた。でも、中西くんは、「では、五年三組の標語は、中西くんが提案した……」と細田君が言いかけるのを制して、最初と変わらない落ち着きはらった態度で言った。

「和泉くんとぼくの合作です」

ゴム印で軽く捺されただけだった「負け」が、その瞬間、焼きゴテで強く胸に押しつけられたような気がした。

中西くんの下の名前は、「基哉」という。前の学校では友達から「モトくん」と呼ばれていたらしい。五年三組でも、標語の一件をきっかけに中西くんを「モトくん」と呼ぶ子が増えてきた。転入してきたばかりの頃はおとなしかった中西くんも、新しい環境に馴染んできたせいか、標語の投票でトップをとって自信をつけたのか、少しずつみんなの輪の中に入るようになった。

入つてみると——中西くんは、みんなの予想以上にデキる奴だった。交通安全週間のポスターは、ズガの得意な十人ほどでつくることになった。持ち寄った下描きのなかでは、きみの絵がいちばん上手かった。(信号は 青になつても 右左)と標語をレイアウトするときには少し悔しかったが、「やっぱりブンちゃんって絵が上手いなあ」「さすがだよなあ」とみんなに褒められて気を取り直していたら、中西くんが「こんなのだう？」と下描きを持ってきた。すでに色がついていた。絵柄の一つ一つが大きく、くつきりとした色使いで、標語の文字もおとなのつくったポスターみたいにきれいだった。

⑧ 負けた。すぐにわかった。きみが苦勞した左右に首を振る子どもの姿も、中西くんは楽々と描いていた。きみは一人の男の子に首を振らせて、マンガみたいな横線を何本も描いて動きを表現していたが、中西くんは右を向いた子を三人、左を向いた子を二人描いていた。そのほうがずっと自然で、(青になつても 右左)の様子もはつきりと伝わる。

⑨ みんなも同じことを感じていたのだろう、標語を決めた学級会のときのような沈黙が、きみを包み込む。

「……あ、でもさー」

三好くんがあわてて言った。「モトくん、ポスター係じゃないから——きみをちらりと見る視線がわずらわしくて、「ポスターはポスター

係でつくるんだからさあ」と笑う表情がうつとうしくて、なにより「モトくん」が気に入らない。

「関係ねーよ、そんなの」

きみはそっけなく、怒った声で言った。誰の顔も見なくなかったから、半ズボンのポケットに両手をつっこんで、体を揺すりながらつぶけた。「ポスター係なんて誰が入ってもいいんだし、もう色まで塗ってるんだから、中西の絵でいいよ、中西、上手いもん、いいよ、すごく、オレのより全然いいって、マジ、ほんと」

せつかくの援護射撃が無駄になった三好くんは、それでもきみに気をつかって、「すっげー、モトくん、ブンちゃんに褒められるってすげーよなあ」と大げさに驚いた。

中西くんは、へえー、とあきれた顔になって、「べつにたいしたことないと思うけど」と、誰にもなく言った。

(重松清 『きみの友だち』より)

問四 線部①「だから、おそらく、きみが勝つ。」とありますが、なぜ「きみ」が勝つのでしょうか。次の□に入る言葉をそれぞれ四字で文章中から探し、抜き出して答えなさい。

「ブンちゃん」は五年三組の□Ⅰであり、彼が考えたというだけでその標語が□Ⅱで一番に選ばれるはずだから。

問五 線部②「『だめだよ』きみは怒った顔で言った。」のはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 他の意見も入れて多数決をしないと、選ばれなかった子に悪いと思ったから。
イ 自分の意見で決まりだと褒められ、そのまま決まるのは照れくさかったから。
ウ ちらりとみて笑ってきた「三好くん」の態度が気に入らず、腹が立ったから。

エ 多数決によつて選ばれることで、自分の力を再確認し満足したかったから。

問六 線部③「ちょっと間違っていると思います」とありますが、「中西くん」が指摘した間違いとはどのようなことですか。二十字以上二十五字以内で説明しなさい。

問一 線部④⑤について、漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直しなさい。

問二 「A」～「D」に入る「細田くん」の様子表現として、最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- 「A」ア 自信なげげに イ 堂々と
ウ 思い切つて エ 不満そうに
「B」ア 気に入らない イ うれしそう
ウ ほっとした エ おこった
「C」ア 救いを求めるように
イ おどろきを隠しきれず
ウ いかりに身を任せるように
エ 何の気なしに
「D」ア 勇気を持って イ はつきりと
ウ 安心して エ 気まずそうに

問三 線部⑥「出端をくじかれた」、⑦「怪訝そうに」の文章中の意味として最も適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ⑥ 「出端をくじかれた」
ア 無視をされた イ 馬鹿にされた
ウ シャベレなかった エ 勢いをそがれた
⑦ 「怪訝そうに」
ア あやしそうに イ 不思議そうに
ウ つらそうに エ 面倒くさそうに

問い七 — 線部④「きみは声を張り上げる。」とありますが、なぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 指摘した内容は正しいが、自分よりあとから意見を言ったくせに偉そうな「中西くん」の態度が許せなかったから。
イ クラスメイトや先生が「中西くん」の意見に納得している様子に焦り、何とか自分の意見に引き戻したかったから。
ウ 意見を発言している「中西くん」の声が大きく、負けないように大きな声で自分も意見を言うべきだと思ったから。

問い八 — 線部⑤「しだいに一つの声の束にまとまっていった。」とありますが、どのような声の束にまとまっていったと考えられますか。「〜」という声。」につながるように答えなさい。

ア 「中西くん」の間違った指摘にだまされそうになっているクラスメイトや先生に、正しい意見を教えたかったから。
イ 線部⑥「他の誰にも負けないぐらい右手をピンと伸ばして、高く掲げた。」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 「中西くん」の意見を心からよいと思ったため。
イ 自分は公正な判断が出来る人だと思わせるため。
ウ 手をきれいに挙げることで票を稼ごうと思ったため。
エ せめて手をきれいに挙げて、同情を誘おうと思ったため。

問い十 — 線部⑦「焼きゴテで強く胸に押しつけられたような気がした。」とありますが、このときの「ブンちゃん」の気持ちを説明したものとして、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 完敗したとおもっていたが、一緒につくったものだから許せなくて、うれしい気持ち。
イ もう少し上手くしゃべれていれば勝てたのにと、強く後悔する気持ち。
ウ 負けた相手にさらに気までつかわれて、どうしようもなくみじめな気持ち。
エ 「中西くん」に改めて「ブンちゃん」の負けだと言われて、許せない気持ち。

問い十一 — 線部⑧「負けた。」とありますが、「中西くん」のポスターのどのような点を見て「負けた」と感じたのですか。それぞれ十字以内で三つ説明しなさい。

問い十二 — 線部⑨「標語を決めた学級会のような沈黙」とありますが、この沈黙は周りのどのような気持ちを感じ取れるものだと考えられますか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア どうみても「中西くん」の方が優れているのに、いつまでも張り合おうとする「ブンちゃん」にあきれている気持ち。
イ 「中西くん」の方が優れていると思っているが、そうと断言してしまうのは「ブンちゃん」に悪いと気をつかう気持ち。
ウ 「ブンちゃん」の方が優れていると言いたいが、せっかくだし打ち解けてきた「中西くん」がかわいそうだという気持ち。
エ 一生懸命頑張っている「ブンちゃん」を否定しようとする「中西くん」の行動に、どうしていいかわからない気持ち。

問い十三 — 線部⑩「なにより『モトくん』が気に入らない。」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問い十四 「中西くん」は今後クラスの中でどのような存在になっていくと想像できますか。説明しなさい。

1 近年、緑茶の持つ「素晴らしさ」が世界的に認識され、広く飲まれるようになってきました。日本人の平均寿命が非常に長く、「日本食はヘルシー」だと認知されたこと、海外での寿司人気に乗って緑茶が寿司とともに飲まれるようになったこと、さらに「和食」がユネスコの無形文化遺産としてトウロクされたことでも関心が高く、ここ数年、緑茶のユシユツ高は増加が続いています。

(中略)

2 インドア飲料に限定されていた緑茶が「X」飲料にもなり得たのは、缶入り緑茶の登場、さらに一度開封してもキャップをして携帯できるペットボトル飲料が誕生したことの2点が大きく関係しています。

3 缶入り緑茶飲料が発売されたのは1985年。大阪のサンガリア社が缶入り緑茶を製造したのが最初といわれています。緑茶にアスコルビン酸(ビタミンC)を添加し、缶に窒素を充填することで、緑茶の水色の変色を防ぎ、緑茶を缶に入れて販売することを可能にしました。(中略)

4 缶入り緑茶の登場により、お茶は「買って飲むもの」「いつでもどこでも飲めるもの」と認識が変わる中、より身近な飲み物としてさらに需要が高まるきっかけになったのが、ペットボトル飲料としての発売でした。

5 缶入り飲料は、一度プルタブを開けてしまうと飲み切らなければならず、開栓後に持ち歩くには不便さを伴います。その点、蓋の開閉ができるペットボトルであれば、いつでも自由に飲むことができ、携帯も可能で利便性が高いです。今ではごく当たり前のことですが、こう

した理由で清涼飲料水の生産が爆発的な急成長を続ける中、お茶のペットボトル飲料は、1990年に伊藤園から初めて1.5L入りが登場、500ml入りも1996年に登場しました。

6 しかし、緑茶をペットボトル飲料にする際には、缶とは異なる新たな問題が出てきます。

7 いちばんの問題は「澱の発生」です。緑茶は、抽出後2〜3日経つと酸化によってカテキン類が酸化重合し、不溶化していくため、粒状の浮遊物となって容器の底に沈殿しはじめます。身体に害はないのですが、ペットボトルは透明容器のため、時間の経過とともに現れる化学変化が明瞭で、おいしそうに見えません。同時に香りも少なくなり、味も爽やかさがなくなり、うま味にも影響してしまうため、それらを改善するための技術開発がおこなわれました。

8 この問題をもっとも簡単に解決するならば、茶の抽出成分を減らして水色を薄くし、茶の香気成分を人工的に添加すれば、とりあえず風味はカバーできます。

9 当初、ペットボトルの緑茶飲料はかなり薄味で、その濃度は、通常、急須で淹れる場合の3分の1から4分の1程度に抑えられていました。誰でも飲みやすい、万人受けする味を狙っていたわけです。

10 そしてその味は、抗酸化作用のあるビタミンCを添加することで安定させています。これはビタミンCとお茶に含まれるカテキンの抗酸化作用が相補的に作用し、茶飲料のカテキン含量が安定することを利用したものです。

11 味に影響が出るのではと思われるかもしれませんが、心配はご無用です。緑茶のペットボトル飲料に含まれるビタミンCは500mg当たり100mg程度なので、味に変化はありません。

12 これは茶飲料に含まれるカテキン量の経時変化を化学的に分析して導き出された製法で、実際は飲料の味に影響が出ないギリギリの量のビタミンCを加えることで、最大限、味の安定化が図られています。これもお茶の味を変えずに長く保つための、見えない工夫のひとつですね。

13 A、これよりもビタミンCの添加量を増やした場合は、舌ではつきりわかる味として表出してきます。紅茶であれば、レモンティーのようになっておいしく味わえますが、緑茶はとも飲めたものではありません。そんな紙一重の分量でお茶のおいしさは保持されています。

14 そもそも緑茶の品質に悪影響を及ぼす原因には、「光」「酸素」「温度」の3つがあります。ペットボトルは、光の透過性が強いポリエチレンテレフタレート(PEE)という合成樹脂から作られているため、容器に緑茶を注入した直後から光による劣化と酸化反応が起きはじめ、時間の経過とともにお茶の抽出成分が変化してしまうのです。

15 この問題をどのように解決したのか、伊藤園の開発担当者に聞いてみると、「ナチュラル・クリアー製法」という製法で1996年に特許が取得されていました。

16 緑茶の抽出液を「マイクロフィルター」と呼ばれる天然素材の細かい膜で濾過することで、澱の原因物質となる微粒子を取り除くことがポイントです。この微粒子を除去できるようになったことで「澱」の問題は解消され、水色に濁りがなく、透明度の高い状態を保てるようになりました。 B 原材料の見直しもおこない、国産の新鮮な茶葉を使用することで、香り、滋味、うま味を高めたといえます。

17 また、冬は冬で別の問題が出てきます。サウイ時期も店内や自動販売機で販売する場合は、缶であればそのまま温めたり専用ウォーマーを使用したりできるのですが、ペットボトルは容器の材質・性質上、同様に対処することができません。ペットボトルを温めてしまうと、ボトル容器が歪んで変形し、お茶の水色も変化してしまうのです。今でこそ当たり前のようにコンビニや自動販売機で温かいペットボトルのお茶を購入できますが、この点を解決しないと、商品化はできませんでした。

18 C、ペットボトルの容器を多層構造にすることで形状の變形・水色の劣化を防ぎ、さらに滋味の研究も重ねて、温かいペットボトルのお茶は完成しました。単に容器を変えるだけではなく、温めるときに最大限においしくなる茶葉の組み合わせを数百通りジッケンし、抽出温度は1℃単位、抽出時間は1秒単位で調整してたどり着いた味だといいます。

19 こうして、緑茶飲料は四季を通じて楽しめる商品になり、海外でも広く愛飲されるようになりました。私たちが室内、屋外、移動中にと、いつでもペットボトルのお茶が飲めるのは、メーカーのさまざまな創意工夫で、自然に起きてしまう化学反応を抑えることが可能になったおかげでもあるのです。

(大森正司「お茶の科学」より)

問い一 線部②③について、漢字の部分はひらがなに、カタカナの部分は漢字に直しなさい。

問い二 文章中には次の一文が抜けています。どの段落の最後に続けられればよいですか。形式段落番号で答えなさい。

しかし、茶葉本来のおいしさからは離れてしまうことになり
ます。

問い三 A C に入る最も適当な言葉を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア そこで イ もし ウ さらに エ しかし

問い四 緑茶が海外でも飲まれるようになってきた理由として、筆者はどのようなことを挙げていますか。三つ答えなさい。

問い五 《X》には「インドア」と反対の意味の外来語が入ります。片仮名で答えなさい。

問い六 ペットボトル飲料の利点を、缶入り飲料と比べる形で説明している形式段落を探し、番号で答えなさい。

問い七 線部①「それらを改善するための技術開発」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 「それら」は、緑茶の見た目や香り、味の質の低下を指しますが、その原因を文章中から四字で抜き出して答えなさい。

(2) 「改善するための技術開発」について説明した次の文の

に入る言葉を、それぞれ指定された字数で文章から抜き出して答えなさい。

I (五字)

II (四字)

III (五字)

同じはたらきをもつ

IV (三字)

を加えることで味の

を図った。

問い八 線部②「紙一重」のように、次の①②も漢数字が使われている言葉です。に入る漢数字を答えなさい。

① 早起きは文の得

② 転び起き

問い九 線部③「別の問題」について、次の各問いに答えなさい。

(1) 具体的にどのような問題ですか。「〜という問題。」に続くよう、二十字以上三十字以内で答えなさい。

(2) メーカーは、この問題を解決するためにどのようなことをしましたか。文章中から十二字で抜き出して答えなさい。

問い十 本文の内容と合っているものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 缶入り緑茶飲料の開発により、緑茶はどこでも飲めるものとして広く知られるようになった。

イ 大阪のサンガリア社は研究を重ね、ペットボトル飲料の開発に初めて成功した。

ウ 緑茶をペットボトル飲料として売り出し始めた頃は、品質の変化をできるだけおさえるために味を薄くしていた。

エ 光による劣化さえ止めることができれば、緑茶の味や質をよい状態で保つことができる。

